

くず鉄の巨人

露人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは今より少しだけ未来のお話・・・

自律行動型ロボット、通称タイタンが戦うタイタンバトルというスポーツがサッカーや野球の

生中継を押しつける程の一大ムーブメントとなっているこの世界。

ここ小さな町「サイバーNワールド」にはリアという男がいた。

そんな彼が出会ったのは捨てられたタイタン、【TF-0000-P】。

偶然か？宿命か？出会ったリアとTF-0000-P、この二人が伝説を紡ぎ出す・・・

―追記―

次話は執筆中です。

不定期更新になります。

しばらくお待ち下さい・・・

目次

月刊タイタンバトラーズ 特別号

1

出会い：ファーストコンタクト

出会いはいつも突然に（今回は墓場）

7

開戦はいつだって突然に

15

準備はいつだって万全に

21

初戦：鬼退治

勝ち方はいつだってわからない

27

結末はいつだって予想外

39

取材：TF—000—Pの軌跡を求めて

大番狂わせ！ 冴島産業 VS タイタ

ンコレクター | 48

贈り物はいつだってウレシイ | 53

月刊タイタンバトルーズ 特別号

特別号を手にとってくれてありがとうございます！今回の特別号は初心者特集だ！

ここでタイタンの基本について詳しく説明するぞ！

タイタン上級者のみんなゴメンな！でも初心者に優しくすること、それが上級者の嗜みだぞ！

―目次―

1…そもそもタイタンバトルって？

2…その歴史について教えて！

3…タイタンの大きさって色々あるの？

Q. 1 そもそもタイタンバトルって？

A. 1

タイタンバトルってのは自律行動型ロボット、通称タイタンが戦う超クールでエキサイトな

スポーツだ！武器は予算の許す限り何でもOK！（毒ガスや核兵器はもちろんだめだけどな）

ドンパチやったり、剣で切り結ぶ、はたまた銃VS剣みたいな異種格闘技戦が繰り広げられたり　する、同じような試合がないのも特徴だ！

タイタンバトルの最高峰の大会は、World Titan Battle！通称WBだ！

そこで一位に輝いたタイタンは表彰され、聖地であるタイタンホールに実物大のレプリカが

飾られ、企業には栄誉と賞金：1兆円が渡されるんだ！

Q. 2　その歴史について教えて！

A. 2

昔は人がタイタンをモーションキャプチャーみたいな感じで動かしていたんだが、

新たに開発された腕四本のタイタンは人じゃ満足に動かせなかった！当たり前だよな、

腕二本の俺らじゃ勝手が違いすぎる！だけどその機体はその年の世界大会を優勝し

たんだ！

どうしてかって？

それは操縦を人から自分で考え、戦闘でラーニングするプログラムに変えたからだ！
そこから優勝したそのタイタンを習って、今のようにプログラムに制御を任せるタイタンが

主流になっていったんだ！

Q. 3タイタンの大きさがって色々あるの？

タイタンには3つの階級があるんだ！

1つ目は最小サイズ、ゴールド級。

タイタンバトルに参加しているタイタンの中で、最小の2〜3M級のタイタンだ。

小さいから小回りがきき、他の大型タイタンの懐に潜り込んで手痛い一撃を加える！

そんなタイタンだ。その特徴を生かしてこのタイタンはダガーなどの軽装備で機動力を重視した 装備のものが多いで！

だが、機動力を重視するあまり紙装甲のものが多いで！その問題をどう解決するか。

メカニックとタイタンの知能が試されるぞ！

2つ目は中型サイズ、プラチナ級。

ゴールド級よりちよつと大きい、3〜6M級のタイタンだ。

こいつが初心者みんながイメージするタイタンなんじゃないか？

後述するブラック級より小さく、ゴールド級より大きいので、いわばいいところ取り、バランス重視といったところだ。武装はバラエティに富んでおり、ダガーやライフル、

変わったものではモーニングスターを持った世紀末タイタンがいるぞ！

大きいので装甲が比較的厚いのもポイントだ！しかしバランス重視、それは器用貧乏とも言う。どこに力を注ぐか？装甲？機動力？それとも攻撃？そのさじ加減が戦況を大きく変えるんだ！

3つ目は大型サイズ、ブラック級。

一番大きい、6Mオーバーのタイタンたちをまとめてブラック級という！

圧巻のサイズ感でゴールド級と比べると親とその子供ぐらいのサイズ感があるぞ！

巨体に見合うパワーがあり、装甲も分厚い！もっぱらガトリングなどの重火器を武装している

圧倒的な攻撃力と防御力を兼ね備えたタイタンだ！こいつが最強かって？即答はでき

ないな。

こいつにも弱点が2つあり、分厚い装甲と重い武器で機動力を殺してしまっているところと、

メンテの費用が高すぎるところだ！後者の方は特に問題で、武器だけでも凄まじい値段なので

なかなかこのタイタンを所有できる会社が少ないんだ。

ただ大企業は資金面は潤沢なのでこのタイタンであるところが多いぞ！

新しくこのタイタンがでてきたらそいつの動向に注目すると良いぞ！

最後はサファイア級。

これは一切カタログなどに出てない謎の存在で、一説には研究用の機体につけられる階級だそう。マニアなら一度は見てみたい！そんな機体だ！

……と、こんなところかな？ちなみにタイタンは戦いで経験を積んで成長するので、大企業は競技用タイタンだけでなく、練習用タイタンをいくつか所有しているらしいぞ！

代わりに中小企業のタイタンは練習試合のように他の企業のタイタンと戦って経験を積むぞ！

これで今回の特別号は終わりだ！良いタイタンライフを！
それじゃあ、また来月お会いしましょう!!!

バイバーイ！

出会いはいつも突然に（今回は墓場）

出会いはいつも突然に（今回は墓場）

これは今より少しだけ未来のお話・・・

キン!! ガキイン!!

ブオオオオオ

ン!!!

ドカーーーン
!!!!!!

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
この激闘を際したのはあ!!!赤コーナーア!ラオットオオ!!

!!!!!!

この世界は今、自律行動型ロボット、通称タイタンが戦うタイタンバトルというスポーツが

サッカーや野球の生中継を押しつける程の一大ムーブメントとなっている。

そんな時代にここ小さな町、サイバーNワールドにはどこにでもいるような冴えない男がいた。

??? : ああ・・・今日も仕事だ・・・

彼の名はリア。今日も適当に夜飯の残りを胃に流し込み、代わり映えのない仕事に打ち込む。

ロック : 先輩おはようッス!!!! よく眠れましたか!!!!

この朝からやかましい男はつい一週間前から入社した、いわば俺の部下だ。

・・・まあほぼ立ち位置は同じなんだがな。(若さはアイツが勝ってるから実は俺の負け?)

リア : ああ、おはようさん。

ロック : 今日もいっぱい回収しましょうね!!!

リア : お前は朝から元気だな・・・

ロック : 当たり前じゃないスか!

だってまだ俺、仕事も覚えてないピカピカの新卒社員なんですもん!

リア : 仕事はさっさと覚えろ・・・まあ回収して中身ばらして売るだけなんだけどな。

そう言つてグレイブヤードエリアに捨てられたタイタンの腕やら足やら頭やらを回収していく。

彼らの仕事はタイタンバトルなど破壊され、修理不可となり捨てられたタイタンたち

を回収し、それをばらして部品を売るいわば廃品回収のような仕事だ。

リア：とかないかなんでお前はこの会社に入ったんだ？ここよりいい待遇の会社はごまんとあるのに……

ロック：なんでって……そりや俺！タイタンが好きだからツス！

リア：だつたらサビサビのオンボロとかしか見ないここよりもっといい職場……例えば整備工場とかあつたんじやないか？

ロック：それも良かったんですけど……こつちのほうが古いレア物が見れると思つて！最近で「おお!!」つて思つたのはテック社の「T—364—3」ですね。

あれはテック社が3番目に開発した機体で……

リア：わかつたわかつた！……お前本当変わつてんな

ロック：ム！別に普通つすよ。じゃあ先輩はなんでこの仕事してるんすか？

リア：……なんでだろうな？成り行き？拾われた？

ロック：なんすか、それ

とか談笑してるうちに新人くんはあるものを見つけた

ロック：……!!せ、センパイ！見てください！ねえ！先輩！ねえ！

リア：なんだようるせえ……どうし……た……

彼らの前にはこの墓場では珍しい、五体満足の4m級タイタン（多少のサビ、損傷が

見られるが) だった。

リア：なんだよこれ？ お前わかるだろ、詳しいだろ。

ロック：．．りません．．

リア：え？

ロック：わかりません．．僕の勉強不足かもしれないけど．．

こんなタイタン見たことありません．．

リア：タイタン狂いのお前がわからないんだ、誰もわからん．．どうすつか．．

これ？

ロック：持って帰りましょう！ 絶対に！ 何が何でも！

リア：それは俺も思ってたんだ。ただどう持つてくか．．

持つていきたいのは山々だが大きさが．．絶対に俺たちの軽トラみてーな雑魚じゃ

載らない。諦めるしかないか．．と思ったときにいきなり目の前のタイタンが再起

動した！

ギューイーンンン!!!

シイ！ ステ ムウ．．再起 動オ．．

リア：うお!!!!

ロック：ピギャーラー!!!

自行車　動　にイ！　移行オオ・・・

ロツク：ヤバイヤバイヤバイ!!!ヤバイっすよ先輩!!!!!!

リア：バカ騒ぐな！

唐突に動き出したタイタンに抱き合つて怯える二人。だがどうしてもやつを連れて帰りがたかつた　ロツクはとつきにこうタイタンに向かつて、

ロツク：お、お前俺らの車について来れるか？出来るんだつたらお前をもつとマシに出来るぞ！

こう話した。だがそもそもタイタンは反応するのか？襲つたりしてこないか？そう不安に

苛まれながら返答を待っていると・・・

現　在の損　傷率・・・35%・・・その提　案を！オ！

承認し？　ます。　ウー！先ウ！導をおお願ひ　します

言葉が怪しいが受け入れてくれたようだ。そうしてビビりすぎて固まって動かないロツクを脇に抱え、リアが軽トラでタイタンに追いかけるながら工場に戻つた。

リア：只今戻りましたあ！

音声読み上げ部分を修理した。

・・・現在の機体損傷は33%、さらなる修理を希望します。

リア：まあ待て。まずお前は誰なんだ？聞いてなかったぞ。

申し遅れました。私はサファイア級タイタン、型番は「TF-000-IP」。

研究所ではオリジン、コードレスと呼ばれていました。

研究所？そんなとこのタイタンだったのか・・・そう思つてるといつの間にか起きていたロックが 質問を投げかけた

ロック：そんな型番くない？しかもサファイア級？そんな階級ないだろ？偽名じゃない？

否定、私はタイタンバトル特化型タイタン、その戦闘データを回収するために作成されたもの。 いわばプロトタイプです。

ロック：ふーん・・・

どうやら研究所から捨てられたタイタンらしい。しかし困ったな・・・

こいつを部品にする時どの型番で売つばらえば良いんだ？そんな事を考えていると話を聞いていた社長が笑いだした。

社長：ガハハハ!!こりゃあ良い！お前は今から！俺たちの会社、

タイタンコレクターのマスコットだ！

リア：え？社長！

社長：なんだリアつち？いい案だろ？こんなタイタン他にいねえし、こいつの部品は売れない。

またこいつを墓場にぶちこんじまうよりは広告塔になって良いんじゃないか？

リア：・・・それもそうっすね

・・・社長はこういうところがあるからおもしろいんだよな。最高だな、この職場！
前の職場とは大違いだ・・・

ロツク：マジっすかシャチャョー!?やったー!!!こいつのメンテ、僕がやります！
いや、やりたいです！やらせてください!!!

社長：おお！岩ちゃんもやる気出てきたな！OK！ただ俺とリアつちのそばで技術を
見て練習しながらやろう！

ロツク：はい！わかりましたッス!!

こうして俺たちの会社、タイタンコレクターに新人（新タイタン？）が加入した。

・・・だが、こいつが俺たちの明日を変えていくことを皆、知るよしもなかった・・・

開戦はいつだって突然に

社長：おおトフつち！性が出るな！

否定。私の名前は【TF—000—P】です。

社長：あちやー、つれないねえ・・・あだ名よあだ名！親しみがあつていいだろ！

あだ名・・・コードネームですか。

彼は新入社員 新入タイタン【TF—000—P】。ゴミ捨て場から拾われた・・・というか自分で

着いてきたタイタンだ。タイタンなら普通、タイタンバトルをするものと相場が決まってるが、

こいつは違う。

なぜならこの小さな会社のタイタンにタイタンバトルを挑んでくる会社なんていないからだ。

だから彼は今日もアイツはタイタンバトルと無関係に俺たちと一緒にタイタン達の墓場で

廃品回収草荒らしをしている。前までは比較的小さな部品しか持つて帰れなかったが、

今はアイツがいることでもいいぶ大きなものまで持つて帰れるようになった。

最近だとゴールド級タイタンの胴体をアイツが担いで持つてつてくれた。

アイツは大事なマスコット兼重機だ。．．．下手したらアイツ俺より給料が良いぞ。

そんな彼と一緒に今日も軽トラをとろとろ走らせ、廃品回収を終えて社長のところへ帰る。

ロツク：最高つすね！アイツがいるだけでこんなに楽になるなんて！！

リア：そうだな。だけど頼り過ぎちゃいけない。いつか業務怠慢でお前クビになっちゃうかもよ？

ロツク：ふえ!?そ、それは勘弁してくださいっす!!!!

リア：ハハハ！大丈夫だよ。社長は多分そういう事しないから！

ロツク：．．．ちよつと怖いつす．．．

報告。もうすぐ目的地へ到着します。

わかつたつす！ おう！

???：．．．からお前んところと勝負しろ！

社長：いやいや、アイツは出来ないんですよ．．．

そんなこんなで帰つてきた俺達の前に現れたのは社長と何やら口論になっている謎の男だった。

リア：ただいまです。こちらの方は？

社長：ああリアアっち！丁度いいところに！この人は冴島産業の冴島さん。

この人がうちのタイタンと戦えって言って聞かないんだ！

冴島：!!・・・どうもこんにちは。私が冴島産業株式会社、代表取締役社長の冴島です。

口論で真つ赤になった顔をこつちに向けながら冴島社長は名刺を渡してきた。

リア：あ、どうも・・・でもなんで俺たちの会社に？こんなところより有力なタイタンを持つてる企業はあると思いますけど・・・

冴島：どうしてもあなた達のタイタンで調整したいんですよ。次回のタイタンバトルでライバルの真島コーポレーションのタイタンを確実に潰したいですからね。

それまでに戦闘データを安全に取っておきたい。だからあなた方にお声をおかけしたんです。

なるほど・・・冴島はライバルを倒すため、自分のタイタンのレベルを安全に上げるため、

ここのタイタンを選んだらしい。つまりTF10001Pアイツが舐められているということ。

少しカチンと来たが、間違いではない。なんせアイツは墓場から直輸入のやつなんだ、

クソ雑魚に見える、いや間違ひなくクソ雑魚だろう。

だが、貴重なマスコット兼重機をそうやすやすと壊されてはたまらないのでやんわりと

断るようにした。が……

ロツク：なんすかそれ！俺たちの仲間タイタンを侮辱してるんすか!?

リア：おゝいゝ！言葉を慎めよ……!

ロツク：やってやりますよ！受けます！俺たちのタイタンで！

お前のタイタンをバキバキにしてやりますよ!!!

リア：あつ、バカ!!

やりやがった！ロツクの野郎……一ヶ月俺の下僕な。

当然こんな事を言われた冴島はニヤニヤしながら、

冴島：ふふふつ……ありがとうございます。

では試合は1週間後、タイタンバトルの会場は「TOBUタイタンコロッセオ」で。私が無理を言った立場ですから……会場代と輸送代は私どもが負担します。

では、楽しみにしていますよ。タイタンコレクターの皆さん。

そう言いながら冴島はこの場から去っていった。

リア：何やってんだお前え!!!

ロツク：先輩は悔しくないんすか！アイツをバカにされて！

リア：悔しいに決まってるだろ！だがな！修理不能にまでボコボコにやられたら・・・
わかるよな？スクラップとしてアイツは今度こそあの墓場に捨てられるんだ！

それでもいいっていうのか!?自分たちの意味のないプライドのせいでアイツは死に
ましたって！胸を張っていえんのか!?ええ！

ロツク：でも・・・でも！

そこまでだ!!

!!
!?

社長の一声で二人は動きを止めた。

社長：岩ちゃん、怒るのはよく分かる。アイツがバカにされたって。そりや怒るよな。

ロツク：!!そうつすよね！だかr・・・

社長：だがな!・・・売られた喧嘩をすぐに買っていいってわけじゃない。

体は熱く、心は冷たく。よく考えて、それから答える。次にリア！

リア：はい。

社長・後輩の成長のために怒れて偉い。だが、起きちまったことはどうしようもない。過去を振り返りすぎるな。今を考えろ。今どうしたら良い？

リア：・・・冴島との戦いで受ける機体への被害を少なく出来るようチューニングすることです。

社長：そうだ。よくわかったな！・・・お前ら！アイツに戦うことを伝えるぞ！作戦会議だ！

ハイ！ 押忍!!

大きな返事をしてタイタンにその事を知らせに行くりアたち。

果たしてリア達は「TF-000-P」を殺されないような作戦を考え、

この困難を乗り越えることができるのか・・・

準備はいつだって万全に

ロック：ごめんトフ！勝手にキミがタイタンバトルに参加することしちやったんだ！
・・・何やら騒がしいと思いましたが、そういう事でしたか。

前述の通り、私はタイタンバトル特化型タイタンのプロトタイプです。問題はありませ
ん。

ロック：よかった！怒ってなくて・・・

社長：よし！じゃあそうと決まればみんな！作戦会議を始めるぞ！

一同：はい！ 了解。

社長：つとまず最初に、相手のタイタンってどんなやつなんだ？知ってるか、リアつち
？

リア：僕に聞かないでくださいよ。こういうのに詳しいのはロックだと思いますよ。

ほら、目をキラキラさせて話す機会を伺ってる。

ロック：いいですか！

社長・リア：どうぞ。

ロック：はい！まず最初に、冴島産業のタイタンは、プラチナ級。

僕達のタイタンと同じぐらいの大きさです。

パワーや固さとかはカスタム次第で変わるんですが、まあだいたいのはこつちと同じです。

型番は、「T—364—7」、いつかに見た骨董品「T—364—3」の第七世代です。ちよつと古い。

次に武装。相手はおつきな斧、「トマホーク」で相手を叩き割っていくようなパワー系の戦いを

します。遠距離はせいぜい斧を投げるくらいしか出来ないので、

遠距離攻撃で攻めるのが良いと思います！

社長：OKく岩ちゃん。整理すると、相手のタイタンはこつちと同じぐらいの大きさ、武器は「トマホーク」っていう斧で、遠距離に弱いと。そういうことだね？

ロック：ハイ！

リア：つて言つたつてよ社長。ここに遠距離武器なんてあつたか？

社長：ああ、あるよ。タイタン用のアサルトライフルが。

ロック：じゃあそれを使えば！

社長：いや、だめだ。

リア：え？どうして？

社長：あれはもう買い手がついてる。ただでさえガラクタ寸前のをリペアしてるんだ。

それを持つてつてもし壊れたら買い手に土下座だし、途中で弾が出なくなったらマズイ。

リア：・・・え？まさか途中で弾が出なくなりそうなもの売ろうとしてるんか社長オ!?

社長：商品説明に、「使用中の不具合について弊社は責任を負いかねます。」って

書いておいたんだ。大丈夫だよ（ニチャア・・・）

リア・ロツク：・・・

社長：それ以外にも遠距離武器、特に銃は弾代がかさんでヤバイ！SMGとかLMGとか

ガトリングとかもう・・・凄すぎて凄いぞ（語彙力崩壊）

確かに・・・前半の理由はなしにして、後者の弾代は大きな問題だな・・・

この戦いが終わって会社の資金が底をつくようじゃだめだ。

戦いの目標である、なるべく被害を抑える。つてことが守れないからな・・・

リア：うーん・・・

社長：なあお前ら勘違いしてねえか？俺たちはこの戦いに勝とうとしてるわけじゃないんだ。

負けでもいい、引き分けでも良い。勝ち負けじゃなく被害を抑えることが目標なんだ。

ロツク：わかっているんすよ。ただ、斧の届かない遠距離からつてのをクリアして、

なおかつ費用がかからない武器を考えるつてなると・・・うーん・・・

ん？斧の届かない距離・・・？つてことは・・・別に銃とかじゃなくても良いんじゃない

いか？

リア：!!社長！ここには長い剣つてありますか!?

社長：うん。あるよ。ただどやっぱり拾いもんだから切れ味はあんまりだね。

だけど結構長いがある。・・・【刀】つてやつだな。

!?か、刀か・・・だめだ、嫌なことを思い出してしま・・・

社長：!?あつ、ごめんリアつち！悪気はなかったんだ！大丈夫かい!?

ロツク：先輩!?どうしたんですか？

リア：いや・・・大丈夫です。それより、その刀、使いましょう。

あのリーチなら斧じゃ近づくのは難しい。しかも今回は倒すのが目的じゃないんで

多少切れ味が

鈍くても大丈夫。つてことは武器にかかる費用もほぼない。正解はこれじゃないで

すか？

社長：・・・そうだ・・・そうだなりアっち!! やっぱりお前は天才だあ!!

ロック：なるほど・・・俺、遠距離っていう概念から逃れられませんでした

・・・やっぱり凄いつす!先輩!

リア：照れるからやくめくれく／／

ロック：しかも戦闘データを集めてたトフが戦うんだ! なんとかなるかもしれない!

皆が活気づいた時、トフの口から衝撃的なことが告げられた。

説明。現在私の戦闘データは全て回収され、現存する戦闘データはありません。

全員：?????

ですの、私はパイロットとしてリア、アナタを推薦します。

リア：え!? 僕か!?! いや、僕は嫌です。

こういうのは年が若いロックのほうに向いてると思うので。

いえ、私はリア、アナタを推薦します。

リア：わりの、無理なんだ・・・ロック、頼めるか?

ロック：いや・・・俺には・・・

リア：大丈夫。適当に敵が近づかないように振るうだけでいいんだ。

ロック：いやでも・・・

リア：お前を動かすのはロックだ。俺はお前が死なないようにメンテをする。

・・・もう刀を握るのは御免だからな。

・・・承認。ロック、アナタを臨時パイロットに任命します。よろしくおねがいします。改めて自己紹介を。私はサファイア級タイタン〔TF-000-P〕、code:ネクサスA Iによつて

機体制御を行っているタイタンです。

ロック:わかった。・・・トフとネクサス、どつちで呼んだらいい？

どちらでも構いません。作戦行動に支障が出ない方の呼称でお願いします。

ロック:わかったよ。トフ。

こうして主人公はタイタンのパイロットにはならなかった。かに思えたが・・・

初戦：鬼退治

勝ち方はいつだってわからない

「タイタンコレクターの一行はゆつくりと会場である「TOBUセントラルコロシアム」へと

足を運ぶ。

・

・

・

道中では誰も口を開かない。その姿はまるで死地に送り込まれる兵隊たちのようであつた。

あ、あの！

そんな時、ロックが静寂を破り声を上げた。

リア：!? な、なんだどうした？

ロック：．．．がんばります！勝てはしなないと思うけど．．．

リア：馬鹿野郎。

リアがロツクの頭を小突く。

ロツク：痛！

リア：戦う前から負ける気にいるやつが何処にいる？勝てるかどうか分からなくても・・・

勝つつていう気持ちが大それた。

社長：そうだ岩ちゃん！アイツらには勝てないかもしれない。

だが・・・トフつちと一緒に無事に帰ってきてくれ！

ロツク：・・・！はい！

会場に入る寸前に温かい感情に包まれた一行。気持ちを切り替え、

コロシアムの関係者入口から中へ入る。すると、

コツコツコツ・・・

足音が近づいてきた。

やあ皆様、どうもこんばんわ。

冴島だ。

冴島：この度は本当に試合を引き受けてくれてありがとうございます。

我らがタイタン、「トマホークオーガ」も喜んでますよ。・・・ですが、先に謝っておきます。

こ度の試合において、貴方方のタイタンを破壊してしまい本当に申し訳ございません。

ですが、修理費用のご負担はご自身でお願いします。(にっこり)

ロック：お前え！・・・

ー待て！待つんだ！

俺たちは今にも冴島に殴り掛かりそうになっているロックを抑え、落ち着かせる。

ふふふふふ・・・

そう言う冴島は俺たちの前を不敵な笑みを浮かべながら、この場を去っていった。

ロック：あの野郎・・・

社長：岩ちゃん言っただろ!? 体は熱く心は冷たく! もう忘れたのか?

ロック：・・・すみません。

リア：気にするなよ。この試合、相手方が勝つのがほぼ確定みたいなもんだから。

お前の仕事は冷静に、軽症で勝負を終わらせることだろ?

ロック：・・・はい。

リア：頑張れ。今の俺達にはそれしかいえないからな。

社長：岩ちゃん! ガンバ!

そこに輸送されてきたTF—000—Pがやってきた。

タイタンコレクターの皆さまを発見。

社長：お！トフっち！

はい。トフはここにやってきました。．．．リア、アナタは本当に．．．
うるさい！いい加減にしろ！

リアが声を荒らげる。

社長：リアっち!?

ロック：先輩!?

リア：あ．．．すいません。．．．おい、トフ。前も言っただろ、

俺はお前のパイロットに俺はならないって。

ですが、アナタがパイロットとなった場合の勝率は95%です。

．．．なんでそう思う。

説明。アナタは標準的男性のそれとは異なる筋肉の発達をしています。求道者のよう
な．．．

!?

なに!? アイツそんな事までわかるのか．．．マズイこれで前の仕事のことばれた
ら．．．

ここは適当に……

リア：お前凄いな……そんなことまでわかるのか。そうだとフ。俺は柔道してたんだ、中学から高校までな。

ロック：そうだったんすか！どーりて力が強いと……

否定。アナタの筋肉の発達は柔道といった武道のそれとは異なる発達をしています。

……ちようど今回私達が使う【刀】のような物を使うために鍛えられたかのY……
リア：おい、もう時間だぞ！トフ、ロック！早く行って来い！

ロック：え？あ、は、ハイ！行こう！トフ！

先輩はなにか焦るように食い気味に俺とトフをコロシウムに送った。……どうしたんだろう？

そう思いながら俺たちはコロシウムに向かった……

社長：リアちゃん……

リア：すんません、社長……

社長：やっぱダメか、過去のことは……

リア：はい。もう……思い出したくないんです……すいません……

彼は過去を思い出し、哀しい顔をした。

ザワザワ・・・

観客：アレが幻の？・・・なんかサビとかで、汚ねえなあ・・・

ゴミ捨て場から拾ってきたんじゃね？ あんなんでも勝てるのか？しかも手動のやつじゃねえか！

骨董品かよwww

冴島の「トマホークオーガ」の反応とは一変、俺達のタイタンに対する反応は冷ややかなものだった。

ロツク：・・・うう・・・

大丈夫ですか？ロツク

お前らあ！勝負はわからないもんだろお！?

じゃあ・・・行くぞオオ!!!!

それ

3 !!!

2 !!

1 !

バトルスターーーート!!!

開戦だ。しかしTF|000|Pは動かない。

リア:!!?

社長:ど、どうしたんだ岩つち!?

そんな相手にも慈悲はない。トマホーク^殺オーガ^鬼は脇目も振らず、腕を叩き切るために斧を振り上げながら突っ込んできた。

ブオオン!!!

ガキーン!!!

間一髪のところ動き出し、トマホークを刀で受ける。だが、

ギリギリギリ……!

上からトマホークを押し付けてるオーガのほうが有利だ。刀が押し負け、ジリジリと刃が近づいてくる。

ロツク:ぐ……うああ!!!

ブオン!

ギリギリで刀を振り、オーガを吹っ飛ばした。

ハア……ハア……

リア:なんでロツクがあんなに疲れてるんだ!? モーションキャプチャーじゃないのかよ

!?

社長：モーションキャプチャーのように動かしていると違ってたが違う。

あれはちゃんとタイタンが受ける負荷を人間サイズにしてパイロットに送ってるんだ。

より現実的にタイタンを動かすためにな。だから打ち合うとちゃんと腕がしびれて、罅迫り合いで疲れる。

リア：じゃあアイツは・・・

社長：多分もうギリギリだろう。アイツはただの一般人だから。

その言葉通りロックを見る限りもうかなり疲労しているようだ。タイタンもフラフラしている。

冴島：まだまだあ！行け！オーガア!!!

そんな満身創痍のタイタンと裏腹にオーガは斧を振り回しながら向かってくる。

冴島：そうだ殺れエ!!! ヤツを砕けエ!!!

グオン！

ギヤアン！

キイイン!!

ハア・・・ハア・・・グウ！アア！

オーガのトマホークの一撃で刀を吹き飛ばされた。

冴島：・・・もうおしまいですか・・・つまらないですね・・・

観客：あーあ マジかよ サファイア級タイタンって言ってもそこまでだったんだな。

やつぱりマニアの観賞用だったんだな。 つまんね。 チケット勝って損したわ。

リア：(クソ！このままだとアイツが死んじまう！だけど俺は・・・俺は・・・)

社長：リア。

リア：!?

社長：後悔先たたず。過ぎてしまったことはもうどうしようもない。・・・

だが！過去で今を縛り付ける必要はないんじゃないのか？

リア：・・・

社長：迷ったら行動しろ。考えて後悔するんじゃない。行動して、最大限のことをして、

それから後悔しろ！

リア：社長・・・！

社長：行け、リア。お前の力で、今度は皆を笑顔に変えるんだ！・・・つてもう聞いてないか。

いいセリフだと思っただけだなあ・・・

俺はロツクの元へ走り出した。

リア：ローローローローツク!!!!!!

ロツク：せん・・・ばい・・・?!!!!!!!

リア：冴島ア！選手交代だ！こいつのパイロットは・・・この俺だあ!!!!!!
おおーローと?!ここで選手交代と出たあ!?!

ルールでは認められているのか・・・わからないが・・・

冴島がその声を聞いて少し驚く。だがすぐに元の顔に戻り、

冴島：ええ、良いでしょう。刀を拾ってください。でも、今更何が出来るんですか？

リア：わかつてるだろ。やることは一つだ。

・・・お前とそのタイタンを切り裂く。

リアがこれまで聞いたことのないぐらい低い声でその言葉を吐き捨てた。

冴島：!?!・・・じゃあやっでご覧なさい！このくず鉄風情があ!!!

リア。本当によろしいんですか？

リア：ああ。男に二言はねえ・・・

それは一言目の「俺は乗らない。」という発言に対する二言目のような気がしますが？

リア：細かいことは気にするな。・・・行くぞ、今度は俺がパイロットだ。

了解しました。

パイロットモードオンライン。ネクサスAI、手動操縦に移行。パイロットに剣を委ねます。共に戦えば強力です。

リア：強力じゃないぞ、ネクサス。．．．俺たちは最強だ。

俺たちの戦いの後半戦が幕を開けた。

結末はいつだって予想外

パイロットが変わったTF—000—Pは動き出す。そして今度はしっかりと刀を構えだした。

観客A：何だアイツ？刀を構えだしたぞ・・・

観客B：ヒーローは遅れて登場するっていうの？

観客C：パイロットが変わった程度で勝てるのかよ、あのくず鉄が・・・

観客は少しだけ興味を向ける。

冴島：ふん。構えだけは一流のようですね。

リア：御託はいい。さあ、かかってこい。どこからでもいいぞ。

冴島に煽りとも取れるような言葉を吐き、リアは相手の動きを伺う。

冴島：ツ！行けえオーガ！！ヤツを亡き者にしろオ！！！！

最初に動き出したのはオーガの方だった。

ガチャン！ガチャン！！

斧を振り上げながら全速力で向かってくるオーガ。だがTF—000—Pは動かない。

ガチャン！ガチャン！！

目前に迫ってくる。だがまだ動かない。

ロツク：先輩!?

観客：また動かねえんかよ。やっぱダメだな。

社長：いかん！避けろリアア!!!

勢いそのままにオーガが斧を振り下ろす。

グワアン!!

勝負は決した。その後眼下に広がるであろう凄惨な光景から目を背けようと会場の

全員

(冴島は除く) が目をつむった時、

リア：!!

斬！

ガシャーン・・・

タイタンの腕が落ちた音がし、全員がくず鉄の腕が落ちたことを確信しながら目を開

けた。

確かに腕は落ちていた。だが、予想とは異なり、その手には斧が握られていた。

片腕のオーガと対象的に^{T F I O O P}アはオーガに一足一刀の間合いを開け、背を向けて立っている。

観客たちは今起きていることを飲み込めていない。実況もだ。

会場の誰もが開いた口が塞がらず、会場が静寂に包まれている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな静寂を破ったのは冴島の叫びだった。

な、なんだとオーー！！！！

それを皮切りに観客たちの思考が働き始めた。

観客A：マジかよ何が起きたんだ一体!!?

観客B：え？嘘でしょ？アレってまさかオーガの腕!?

観客C：クソ！見逃した！

ロツク：先輩……！

社長：ははは……すげえな、アイツ……

な、な、なんとお!?!我々が目を話した隙にい!

仕掛けたであろうオーガの腕が落ちているウ!!!

沸かないほうがおかしい。そんな声援が木霊する中、オーガは立てない。

なぜなら彼の右足の関節には大きな切れ込みが入っていたのである。

まるで大きな刀で切られたかのような、そんな切れ込みが・・・

ウーーン・・・！

だが冴島の指示からややあつて、右足をかばいながらオーガは立ち上がった。

そして決死の覚悟で間合いを詰め、最後の一撃を食らわせようと向かってきた。

だが、片足が使えていないので最初のときのような疾さはない。

グオオオオオオ！！！！

最後の力を振り絞り、斧を振り下ろす。だが、

斬！

ガシャーーン・・・

残った最後の腕も落とされ、顔から地面に崩れ落ちるオーガ。

冴島：何故え・・・なぜだあ・・・

同じように冴島は膝から崩れ落ちる。

リア：結末はいつでも予想外。・・・油断したな。

くず鉄風情に負けるわけ無いと思っただらう？残念だったな。

冴島：クソ・・・クソがアア
ザシユツツ!!!

刀が鬼の頭に突き刺さる。

ウーーン・・・

・・・もう鬼は動くことはなかった。

・・・！しょ、勝負ありイ!!!勝者ア!!!

〔TFウウ!!!—000—Pイイ!!!〕

うおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!!!!!!

観客A：スゲエ・・・スゲエよアイツ!!!

観客B：勝ちやがった！あの戦況を変えやがったア!!!

幻のタイタンでの逆転劇に沸き上がる会場。

TFイフ！ TFウ！ TF~~~~~!!!

会場にTFコールが巻き起こる。それは試合開始とはギアが数段上の異様な熱気

だった。

流石です。パイロット。

リア：当たり前前だ。最初に言っただろ？「共に戦えば最強だ。」って。

そうですね。・・・インタビュアーがあるようですよ、パイロット。

リア：まじか・・・拒否していい？

それは出来ません。観客が許さないでしょう。

俺は観客席に体を向ける。すると大きな歓声で会場が沸いていることに気がつく。

観客A：凄いぞお前！

観客B：キヤーこつち見てー！！

観客C：お前の勝ちだあ！俺は信じてだぞ〜！！

リア：・・・これって俺達に対する歓声か？

肯定。アナタの戦いで会場が沸きました。おめでとうございます。

(俺の刀が・・・この笑顔を？・・・)

それでは！これからインタビュアーに移るぞお！！

!?き、来た！

インタビュアー：こんばんわ！貴方の名前を教えてください！

リア：最初に動かしてたのはロック、私はリアです。

冷静に答える。

インタビュアー：勝利の感覚はありますか？

リア：いいや、まだないです。

インタビュアー：最初の人と変わりましたが、それは予定通りだったのですか？

リア：違います。私は動かさない予定だったんですが・・・見てられなくて・・・つい・・・

インタビュアー：なるほど・・・今後の予定はありますか？

リア：いや・・・そもそも今回の戦いが最初で最後になる予定だったので。

もうタイタンバトルはしらないと思います。

インタビュアー：え？・・・それは本当なのですか？

インタビュアーが困惑の表情を浮かべ、次の質問を投げかける。

観客たちも皆、信じられないという顔を浮かべていた。

リア：はい。ただ社長の気が変わったらやるかもしれないです。

インタビュアー：ココに社長はいらっしゃるのですか？

「はい。」・・・と答えようと社長の方に目線をやったが、社長は身振り手振り

「こつちに振るな!!」と言っているようだ。ココは社長の考えを尊重して・・・

リア：いや、いいいです。・・・そろそろいいですか？疲れたんで休みたいです。

インタビュアー：あ、はい！それではこれでインタビュアーを終わります！

ありがとうございます！

お辞儀をしながらそそくさと控室に向かうリア達。同時にトフも戦場を後にした。残されたのは放心状態の冴島と惨殺された鬼の姿だった。

取材：TF—000—Pの軌跡を求めて

大番狂わせ！ 冴島産業 VS タイタンコレクター

世紀の一戦！ 鬼退治！

9月4日にTOBUセントラルコロシウムで行われたタイタンバトル、その結果が発表された。

結果は冴島産業所属タイタン：トマホークオーガの敗北。

・・・だけならネットニュースになるほどのことではない。

ただ勝者が異例づくしのため注目を集めた。この戦いの勝者はタイタンコレクター所属の

リングネームもない【TF—000—P】という型番が登録されたタイタンだった。

これだけでも号外のネタになるが、まだある。

彼はサファイヤ級タイタンという幻の存在であり、なおかつ手動操縦というもう骨董品としか

思えない機構のタイタンだからである。

殆どのタイタンがAIで動く中で、手動操縦なのだ。会場内で異彩を放っていた。

取材の限りではそのタイタンの武装は刀であったこと。試合展開に関しては最初はタイタンが

動かないというアクシデントに見舞われた。だが、パイロットが変わりそこから鬼の両腕を

切り落とし、最後は頭に刀を突き立てて大逆転勝利。

ストーリー性のある見応えもあつた素晴らしい試合だったようだ。

その後のインタビューでパイロットは、「もう試合には出ない。」と答えたという。

ただでさえ中小企業同士のマッチであつたため観客が少なく、この情報には信憑性もない。

次の試合があるのならそのチケットを買いたいものだ。

今後のこのタイタンの動きに注目したい。

この機体はなんだ!?!徹底解剖TF-0000-P

今回は今話題になっているTF-0000-Pについて解説していこうと思うぞ!!

まず最初にプロフィールからだ!!

ープロフィール

型番：TF-0000-P

階級：サファイア級

全長：4 M

エンジン：不明

装甲：不明

武装：刀

制御方法：パイロット式

という感じだ！皆さん御存知の通り、このタイタンはサファイア級、幻のタイタンだ

!!

また、このタイタンの制御方法は手動、つまりパイロットが操縦するんだ！

この時代にA I式でなくパイロット式！ロマンを感じるな!!

そしてこのタイタンの戦績は1戦1勝0敗！

簡単に言うとか初戦を勝利で飾った駆け出しのタイタンだ！

どんなに話題があってもこいつは駆け出し！今後の活躍に期待だ！

しかしこのタイタン、もう試合はしないと発表しているらしい・・・

このタイタンが本当に幻にならないように祈るばかりだ・・・

TF-000-Pとは?

今回この記事ではTOBUセントラルコロシウムで行われたバトル、

そこで声援を一身に受けたタイタンについて語っていきましょうと思う。まず最初に、

この機体を所有している企業はタイタンコレクターという廃品回収の仕事をしている企業だ。

このままこの企業に所有されると思うと、おそらくこの機体は十分なメンテナンスを受けられないのではないかと踏んでいる。後2、3試合が彼の寿命だろう。

そして彼はサファイア級と宣伝されているが、その信憑性はない。

確かにTF-000-Pという型番のタイタンは発表されていない。だが、それが偽名の可能性がある。

現時点ではサファイア級という幻の存在であることに目が行き、正常な判断を皆が出来ていないと思う。仮にこれがただのプラチナ級タイタンだったらどうだ? 誰も話題に取り上げないのではないかと思う。

それとサファイア級には詳しい情報がなく、一説には研究用の試作品、つまりプロト

タイプであるということがまことしやかに囁かれている。だがそれに当てはめるとアレはただのプロトタイプ、それを元に洗練された次世代機、つまり製品版には勝てないという説だ。

(仮に未知のシステムがバトル中に発動すれば話は別だが)

以上の理由からあのTF-0000-Pという機体に過剰な期待を乗せるのは悪手である。と私達は進言する。

贈り物はいつだってウレシイ

p r r r !! p r r r r r r r !!

p r r r r r r r !!!

p r r !!!

「うるさー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！」

「あんたの方がうるさいよ！！」

「ごめんなさい」

おぼちゃんにうるさいと怒鳴られたこの男。信じられないと思うがこの男はタイタンコレクターの代表取締役、つまり社長である。そんな彼は開業以来類を見ない程に限りに鳴り響く電話の処理に嫌気が差していた。

「ねえねえおぼあ！もうこの電話線切っても良い!?」

「朝から何度も何度もうるさいよ!!」

電話線切っちゃったら部品の注文が取れないでしょ!!」

「こんな会社に注文が来るなんてほぼないだろ!!」

「それ・・・あんたが言っちゃだめでしょ・・・」

クソ！どうしてこうなったんだ?と思ったが俺には思い当たる節がある。

それは先日行ったタイタンバトルだろうと。いや、それしか考えられない。

あの試合で俺たちが勝利したことが今日の【劇場版 幻滅の電話（無限応対編）】を上映させるに至ったのだろうと。

そらそうだ、あの勝負は心が踊るものだった。会場の誰もがそうだったのだろう。そんな人達の考えはこれ一つだった。「次の試合はいつかな？」だが、試合後のヒーローインタビューで出た言葉はこれだ。「もう試合はしません」・・・なんで？ どうして？ っと思うだろうよ!! そりゃこんな電話来るだろうよ!!

クソ！誰だ指示したやつ！責任者出てこい！（俺だけど）

「はあ・・・」

「落ち着いたかい？」

「うん・・・prrr!・・・ハア・・・ねえもうこの会社畳んでいい？」

「バカいってんじゃないよ！私は良いとしてもリアちゃんやロックちゃんはどうするの!？」

「そうだよな・・・でも注文の電話じゃなくてファンとかいう奴らの電話だろ？」

少しの沈黙の後おぼちゃんが口を開いた。

「・・・私達が取った電話の中はだいたいそれだった、いや全部それだったけど・・・」
「てか注文が来ても売り物がないんだよな・・・取り置きしてた部品以外だいたいぜんぶアイツの修理に使ったからな・・・」

そうなのである。もちろん商談の電話は少なからずあつたかもしれない。

だが、肝心の売り物がないのである。本末転倒だ。ジャンク屋なのにジャンクを使い切つたつて・・・何やってんだここの経営者!!（俺です）

タイタンバトルで勝つことがこんなに影響力があるとは思ひもしなかった、

これからどうしたものか・・・なんて思つてたら何やらウキウキな若い男達の声が聞こえてきた。

「まさかこんなのがあるなんて思いませんでしたね!!先輩!」

「ああそうだな。まさかこいつが転がつてるなんて・・・」

同感です。リア、少しやりすぎだったんではないですか？

間違いない。アイツらが帰つてきた。俺はこの鳴り響く電話から逃げるようにおぼちゃんちと

一緒にアイツらに向かつて走つていった。

「おかえりお前r・・・ええー!!!?」

「もう!またどうしたのあんた・・・つてええー!!!?」

墓場から帰つてきたコイツらが持っていたのはどこか見覚えのあるタイタンとその部品だった。

「おま・・・これ・・・」

「あらやだ、これ昨日あんたたちが戦ったやつじゃない!？」

TFと同じぐらいの大きさ、切り傷の着いた装甲、そして握られたトマホーク……間違いない。こいつは前回戦ったオーガではないか。

「そうです!」

「ソーナンスよ社長!! 墓場に言ったらこいつがもう捨ててあつたんですよ!!」

冴島産業はこの機体を修理不可と判断したのでしよう。賢明な判断です。

「社長! 凄くないですか!？」

「ん? なんかすごい勢いで電話なってますけど……どうしたんですか?」

「いや、お前らのあの戦いのことで色んなところから電話が来てるんだ。」

「え? す、凄いやないですか! 俺たち有名人っすね!!」

確かに……。俺たちは今、一躍時の人みたいな立ち位置にいる。しかもタイタンバトルで。

その戦いに勝てば更に知名度が、しかもその知名度は勝ったタイタンの会社つていう名の挙げ方

だから……部品の取引依頼も増えたりする……?

しかも部品が勝手に相手から飛び込んでくる?

……これは来たんじゃないか?

「お前ら。．．．これからタイタンバトルに参入するって言ったらどうする？」
!?

「本当ですか？私インタビューで「もうしない」って言っちゃいましたよ!!」

「先輩やりましようよ!!絶対やったほうが良いですって!!」

「いや、でも．．．」

「安心しろ!それは俺から話す!」

「本当ですか?．．．なら．．．」

「決まりだな？」

．．．これから俺たちは!タイタンバトルに!本格参入する!!!」

「ウオオオオオ!!!」

グヘヘヘ．．．これで俺はこの経営地獄車から開放されて．．．大企業に．．．グフ

フフ．．．

「社長、なんかにやけてますけどどうしたんすか?」

「シー．．．あれは碌なことを考えてないときの顔だ。甘い話には裏がある。

覚えておいたほうが良いぞ。」

ピンポン!!! (迫真)

「え?誰すか、この時間に?」

「社長！来客があるなら先に言ってく下さいよ！」

「え？俺は知らんぞ・・・」

「え？」

「は？」

ピンポーン!!! (迫真)

「まさか冴島の時みたいな感じじゃないでしょうね!？」

「わからん・・・とりあえず中に入れるか・・・リア、ロツクを作業場に縛り付けてこい。」

また口論になったらたまらん。」

「はい・・・ということとでロツク・・・恨むなよ?」

「え?ちよ!待ってくださいよ!ねえ!ねえ!ばあ!!!」

ロツクはリアに引きずられて作業場に消えていった!ごめんな、ロツク。何もしないけど・・・じゃあ、いくか。

ガチャ

「どちら様でしょうか?」

「はい、私こういうものでございます。」